本多忠勝の居所と行動

大鹿　真和
（鍛治　宏介ゼミ）

目　次

はじめに
第一章　本多忠勝に関連する一次史料と二次史料
第二章　本多忠勝の居所と行動
　第一節　生誕・岡崎在城（生誕～永禄十二年）
　第二節　姉川の戦い・三方ヶ原の戦い（元亀元年～同三年）
　第三節　長篠の戦い・甲州征伐（天正元年～天正十年四月）
　第四節　本能寺の変・小牧長久手の戦い（天正十年五月～同十二年）
　第五節　旭日姫婚姻・北条討伐（天正十三年～同十八年）
　第六節　万喜（大多喜）・桑名城主（天正十八年八月～死去）
第三章　本多忠勝の武功検証
おわりに

はじめに

本多忠勝は、江戸幕府創立の功績から酒井忠次・井伊直政・榊原康政と共に徳川四天王に数えられる武将である。特に武勇に秀でていたとされ、生涯で六十近く戦場を経験した中で一度も傷を負わなかったという逸話さえ残っている。元来、本多家は安祥松平家（徳川家康の家系）に長らく仕える有力家臣であり、忠誠心も強く、忠勝の祖父の忠豊は主君である松平広忠を逃がす為の殿として討ち死に、父の忠高も若くして織田家との戦いにおいて討ち死にしている。忠勝は幼い頃から家康に仕えており、厚い信頼を置かれていた。また、その家臣団は御付人を中心としているという特徴を有している。御付人とは、忠勝の家臣でありながら、忠勝ではなくその主君である家康と主従関係にある武士のことである。小宮山敏和氏は同様の特徴を持つ井伊家の家臣団を例に挙げ、家康家臣が反抗した場合でも、御付人は家康との繋がりが強く、そのまま反対勢力とはなりにくく、また、家康の意思が貫徹していることで、より安定した権力基盤となりうると指摘[一]している。筆者は、三河一向一揆によって一度家康の権力基盤が完全に崩壊したため、より家康への離反を防ぎやすい御付人という制度を作ったのではないかと考える。忠勝と直政以外にも、同じ徳川四天王である榊原康政も同様の特徴を持つ家臣団を有している。

しかしながら、本多家に関する一次史料は井伊家などに比べると非常に少なく、特に関東転封前の忠勝の動向を知れる史料は少ないため、研究があまり進んでいない。そのため、本稿では、藤井譲治氏編の『織豊期主要人物居所集成[二]』を参考に史料が乏しいながらも、忠勝の生涯を明らかにしていき、忠勝の役割や実際に武勇に秀でた存在であったのか、考察していきたい。

先行研究においては、水野伍貴氏の「本多忠勝と関ヶ原の戦い[三]」や、石神教親氏の「本多忠勝と桑名[四]」などが新しいが、関東転封後の出来事や、時期を特定したものが多く、忠勝の生涯を通して紹介しているものは少ない。また、尾崎晃氏の「本多忠勝（一五四八－一六一〇）―徳川幕府創出の功労者―[五]」においては、簡単な略歴を紹介するのみに留まっており、詳細な行動については記載が無い。

第一章　本多忠勝に関連する一次史料と二次史料

本稿作成に当たり、使用する主要な史料を簡単に説明していきたい。

・『家忠日記』（以下『家忠』）

徳川家康の家臣松平家忠の日記。著者である松平家忠は、家康と祖を共にする十八松平の一つである深溝松平家四代当主である。日記には、天正五年（一五七七）十月から文禄三年（一五九四）九月までの十八年間の政治情勢・外交に関することのほか、日常生活や習慣、能鑑賞や連歌など文化面に関する記述もあり、一次史料としての信頼性も高い。

岩沢愿彦氏は次のように指摘している。

> 家忠は、天正三年（一五七五）父・伊忠が戦死の後、後を継ぎ、深溝城に拠った。関東転封の際にはまず武蔵忍城に移り、文禄元年（一五九二）二月香取郡上代（かじろ、現・香取郡東庄町窪野谷）、同三年同郡小美川城に移った。ついで慶長四年（一五九九）、伏見城の守備を務め、同五年に小早川秀秋らの攻撃を受け、城と運命を共にした。（中略）『家忠日記』の期間は深溝・忍・上代・小美川在城の時代にあたり、武将としての活躍時代がほぼ尽くされていると考えてよい。[六]

また、家忠の孫にあたる松平忠冬により編纂された『家忠日記増補追加』（以下『家忠補』[七]）は、『家忠』に基づき、松平清康から徳川家康までの徳川創業記として編纂されたもので、永正八年（一五一一）から元和二年（一六一六）までの主に軍事、外交に関する記述が多く見られる。当然ながら、家康の祖父清康や父広忠に関する記述は少ないが、家康および旗本衆などに関する記述は非常に多岐に渡っているため、本稿においても参考とした。信頼性に関しては、『家忠日記』に比べると落ちてしまうが、成立時期が寛文五年（一六六五）であること、『家忠日記』に基づいていることなどから、他の二次史料に比べると信頼性は高い。しかしながら、絶対の信頼性は無く、徳川の創業記であるため、取り扱いに注意しつつ、後述の史料や他の史料との比較による史料批判も同時に行っていく。

・『寛政重修諸家譜』（以下『寛政譜』）

『寛政譜』とは、江戸後期の大名・旗本・御家人らの系図集。一五三〇巻。徳川幕府編。文化九年（一八一二）成立。「寛永諸家系図伝」を全面的に改訂し、新たに諸家に寛政一〇年（一七九八）までの系図を提出させ、家督相続者の詳しい経歴を記載したものである。

徳川幕府が編纂した二次史料であることから、一部史実との差異が見られ、注意する必要がある一方、平野仁也氏は、「幕府は事実の正確さを追求する姿勢と、人物像を恣意的に叙述する姿勢の二つの編纂姿勢を取っていた」ことを指摘[八]しており、一定の信頼性があると考えられる。「本多忠勝」項は、『寛政譜』第六八一巻に記載[九]されている。

その他に、文書などの史料は、「大日本史料総合データベース」（以下「大日本」[一〇]）及び『新訂徳川家康文書の研究』[一一]・『新修徳川家康文書の研究』[一二]（以下『新訂家康』・『新修家康』）などを活用して検索している。

第二章　本多忠勝の居所と行動

この章では、前述の史料を活用し、実際に忠勝がどこで何をしていたのか、可能な限り追っていく。

第一節　生誕・岡崎在城（生誕～永禄十二年）

天文一七年（一五四八）三月十七日、忠勝は岡崎市額田郡西蔵前にて生まれたとされる（『寛政譜』）。

永禄三年（一五六〇）五月十八日、忠勝は齢十三にして、桶狭間の戦いの前哨戦にあたる大高城攻防戦で初陣を飾る（『寛政譜』）。桶狭間敗戦後、大樹寺に身を寄せていた家康は、同二十三日に今川勢が撤退した岡崎城に入城し、元亀元年（一五七〇）に浜松に移転するまで本拠とした（『家忠補』）。同月、拳母（金谷）城、梅坪城攻めなどに従う（『寛政譜』）。

同四年（一五六一）二月、織田信長との間で和議が結ばれた（『寛政譜』）。

同五年（一五六二）、清州にて行われた信長との会合に同行している。その後、三河国長澤城にて、今川氏真の家臣小原鎮実と戦う（『寛政譜』）。同年九月二十九日、牛久保城・二連木城・佐脇城・八幡村城に駐屯していた今川軍と赤坂にて戦い（『家忠補』）、首級を挙げる（『寛政譜』）。

同六年（一五六三）三月、牛久保城にて今川軍と戦い、木所助之丞、牧野惣次郎康成と槍を合わせて、助之丞は忠勝の配下が、康成は忠勝自ら傷を負わせた（『寛政譜』）。この記述に関して、牧野康成は当時まだ八歳前後であり、記述の正誤は怪しい。『藩翰譜』では、牧野宗二郎とあり、康成の名前はないことから、康成の父で当時三十八歳の成定と誤ったと考えられる。また、成定は、この三年後に病が原因で亡くなっており、この槍傷によるものの可能性がある。しかしながら、成定は牛窪城主であり、城の大将たる存在が前線に身を置き、傷を蒙って退くということは考えづらいため、牧野氏の配下である国衆の真木（牧）氏の可能性も考えられる。九月、三河一向一揆が起こると忠勝は家康方に属し（『寛政譜』）、十一月二十五日、家康自ら上和田城において一揆衆を破っており、忠勝もこれに従い蜂屋半之亟（貞次）を撃退している（『家忠補』）。この記述について、『家忠補』では初めに植村庄左衛門尉が槍を合わせ、退かせた後水野忠重が追撃を行っている。

同七年（一五六四）二月十日、一向一揆の大将の貞次と親族である家康方の大久保忠俊の仲介により和睦がなされる。今川軍との戦い及び三河一向一揆の平定により、家康は西三河一帯を支配下に置いた。五月二十五日、小原鎮実が守る吉田城を攻める。忠勝は先鋒としてまず木所助之丞と槍を合わせ、味方により助之丞を負傷させると、続いて牧野惣次郎と槍を合わした（『家忠補』）。その後、吉田城・田原城を奪取したことで、家康は三河国を統一するに至った。

同八年（一五六五）、『新訂家康』によると、この年、家康は三河の有力寺社への特権の新規および継続付与や一揆の際に寝返った武将の出奔をはじめ、国内の安定化に努めたとあり、忠勝に関する記述はない。

同九年（一五六六）、忠勝の家臣として都筑秀綱、本多正重をはじめ騎馬五十騎が付属される（『寛政譜』）。この記述に関して、湯谷氏は、後の筆頭家老格である都筑秀綱は、永禄一二年（一五六九）二月二十六日に所領安堵状が出されており、同年の家康遠江入国の際に仕えたものと考えられると指摘[一三]しており、『寛政譜』は誤りで、永禄十二年頃に付属されたものと考えられる。

同十年（一五六七）、京都では永禄の変が起こり、関東においても情勢の変化などがあったが、三河においては衰退する氏真の様子を窺うのみで、大きな動きは見られなかった。忠勝についても同様である。

同十一年（一五六八）、家康は背後を信長に任せ、氏真打倒を始める。三月七日、堀川城を攻め、これを陥落させる（『家忠補』）。この記述に関して、『寛政譜』においては、忠勝は先鋒として功があったとあるが、『家忠補』では榊原康政、松平信一に先鋒の功があったとある。その後忠勝は、戸田忠次と共に浜名城（佐久城）を巡見し、これを降伏させ、酒井忠次と共に浜名城の守将を務める。また、大野頼重、大屋光政、大屋頼次等が付属される（『寛政譜』）。十一月十一日、国衆である祝田新六宛の家康書状に対する副状に、一次史料として初めて忠勝の名前が現れる（「祝田文書」[一四]）。この頃には、既に家康と国衆との取次役を担っていたと推測される。十二月十七日、武田信玄の侵攻及び家臣の裏切りにより、駿府城から掛川城に移っていた氏真を攻めるため、井伊谷城、刑部城を相次いで陥落させる。十八日、家康は浜松城に入城する（『家忠補』）。

同十二年（一五六九）一月十七日、家康は、掛川城攻めのため天王山に着陣する。二十二日、氏真の夜襲を内通していた久野八右衛門及び久野宗能から知り、これを伏兵によって逆に破る。戦いは二十三日まで続き、戦場は掛川城外にまで及び（『家忠補』）、更に掛川城を包囲した（『寛政譜』）。忠勝もこの戦いに従っている。二月十五日、家康は兵を率いて見附城に入り、三月四日、掛川城に兵を出した。五日、忠勝は松平伊忠と共に先鋒として功を挙げる（『家忠補』、『寛政譜』、『藩翰譜』[一五]）。四月十五日、家康は氏真と講和を結ぶ。五月六日、講和に従い、氏真は掛川城を明け渡し、義父の氏康を頼り小田原に向かう。八日、家康が三河国金谷にて巡見していたところ、武田家臣山県昌景三千余騎と遭遇、信玄との間では既に和睦が為されていたが、昌景勢は家康勢が寡兵と見ると

家康の後軍を攻撃した。忠勝らは苦戦したもののこれを撃退した（『寛政譜』、『家忠補』）。六月十日、家康の遠江天方城攻めの際、忠勝は榊原康政と共に先鋒を務める（『寛政譜』、『藩翰譜』）。その後、酒井忠次、石川家成をそれぞれ三河東西国衆旗頭とし、忠勝、本多広孝、鳥居元忠らを一手役[六]の将とした（『寛政譜』）。この記述に関して、五月十日に西三河国衆旗頭の石川家成が掛川城主になり、旗頭が石川数正に代わったことから、『寛政譜』の記述は誤りであると考えられ、通説である三河平定後の文禄九年（一五六六）頃に旗本一手役が成立したと考えるのが妥当である[七]。忠勝も同時期に五十余騎の御付人を付属されており、一手役の将としての役割を持つためだったと考えられる。また、これ以降は旗本一手役として、ほぼ常に家康に帯同していたと考え、天正一八年（一五九〇）に城持ちとなるまで、独自の記述が無い限り、家康の動向を中心に追っていく。

第二節　姉川の戦い・三方ヶ原の戦い（元亀元年～同三年）

元亀元年（一五七〇）一月五日、家康は、浜松城に居城を移し、岡崎城を嫡男信康に譲る（『家忠補』）。この記述に関して、『新訂家康』では、『當代記』[八]などに記述がある、金ヶ崎後の同年六月頃に入城したとする説を取っている。二月二十日、家康は信長の朝倉義景討伐の要請に応じ、三月七日、岡崎より兵を発する（『家忠補』）。この記述に関して、『新訂家康』にて紹介されている四月十九日付武田信玄文書[九]にて、家康の在京が分かり、家康自ら援軍として参戦していることが確認できる。四月二十日、家康は信長と共に京都を発し、若狭を経て熊川に進み、二十五日に手筒山城を落とし、二十六日に金ヶ崎城を囲んだ。二十七日、金ヶ崎城攻めの最中、浅井長政裏切りの報を聞くと夜に木下藤吉郎を殿として撤退。道中朝倉勢に攻められるも家康勢の助けもあり退くことに成功した（『家忠補』）。五月九日、京都を発し、十八日、家康は岡崎に帰る（『家忠補』）。六月二十六日、家康は五千騎余りを率いて近江に入る。二十七日、軍議にて、当初徳川勢は対朝倉景健の第二陣に位置していたが、先陣を願い出て、信長もこれを許している（『家忠補』）。この記述に関して、『藩翰譜』では軍議の記述が無く、強くない方に向かうとして、翌日、朝倉勢に対して忠勝を先陣に攻撃を仕掛けている。しかしながら、『藩翰譜』の記述には、朝倉勢のみで三万騎とあり、明らかに兵数が誇張されていること、姉川の戦いには参加していないはずの朝倉義景の名前があることなどから、信頼性は低い。そのため、『家忠補』がより事実に即していると考えられる。二十八日、信長は陣を東に構え、浅井勢と姉川を挟んで対峙した。家康は西に陣を構え、先陣として、忠勝、大久保忠隣、第二陣として、酒井忠次、榊原康政、松平伊忠、小笠原信興、第三陣として家康本陣を構えた。朝倉勢と戦いはじめると、すぐに朝倉勢は敗退をはじめる。その一方、織田勢は、坂井政尚、池田恒興らが浅井勢の先鋒磯野員昌と対峙するも、敗退を重ね、信長本陣に迫られる。しかし、朝倉勢を破った徳川勢や後軍に控えていた稲葉一鉄らにより、浅井勢は敗退することになる（『家忠補』）。この記述に関して、『寛政譜』では、忠勝が単騎駆けをしたような描写がある。また、すべての史料において、「大軍の中に入り、抜群の軍功を挙げた。」という点は共通しており、忠勝の生涯においても大きな意義を持つ戦いであったことは間違いない。

同二年（一五七一）三月、忠勝は遠江掛塚に侵攻してきた武田水軍を大河内正綱と共に破る（『大河内家伝』「『大日本』[一〇]）。

同三年（一五七二）九月二十五日、信玄は信長討伐及び義昭の将軍擁立を目指し、挙兵する（『寛政譜』）。この記述に関して、『新訂家康』では、「十月三日に本軍二万、北条援軍二千、山県昌景別動隊五千で出立、本軍は上伊那郡から秋葉路を通り遠江に侵入し、別動隊は下伊那郡から東三河に侵入した。」とあるが、『家忠補』において、十月十二日に多々羅城（只来城）、飯田城を落とし、見付に陣を構えたとある。これを正とした場合、信玄は躑躅ヶ崎館（現在の山梨県甲府市）から遠江見付（現在の静岡県磐田市）まで、およそ三万の軍勢を東海道ではなく東山道を通り、山中含め九日で移動し、更に城を二つ落とした後に陣を構えたことになる。この行軍は、甲斐及び信濃といった山地を領地としていることを考えてもあまりに早すぎるため、『寛政譜』の記述を採用した。

十月十二日、信玄が前述の通り多々羅城・飯田城を落とし、見付に陣を構えると、家康は忠勝らを率いて浜松城より出陣し、天龍川を越え、三千騎余りで一言坂に進んだ（『家忠補』）。この記述に関して、『藩翰譜』

では出陣時は八千騎ほどだったが、到着する頃には四千騎にも満たなかったとある。『家忠補』も「大神君ノ兵三千余騎一言坂ニ進ミ向フ」とのみあり、急な出陣であったこと、天龍川を渡ったことから対陣した頃には三千程度にまで減っていたのではないかと考えられる。その後、家康は背後に天龍川を置く正に背水の陣の状態で信玄と対することになる。忠勝は内藤正成と共に家康に対し、「敵は多勢で進退自由の地に布陣しており、我が軍は微勢で地の利も良くないため退くべきである。もし追撃してきたならば、敵軍が天龍川を渡っている際に反転攻勢するべきである。」と進言し、家康もこれを許し退却することになる（『家忠補』、『寛政譜』、『藩翰譜』）。その頃には先陣は既に見付に達しており、武田勢との距離は僅か二反（約二二メートル）ばかりであったが、忠勝が両陣の間に騎馬で乗り入れ、七、八度槍を合わせながら士卒を率いて退却した（『家忠補』、『寛政譜』）。忠勝の従士大鐘彦市により、見付の町に火を放ち追撃を妨害した（『寛政譜』、『藩翰譜』）。この記述に関して、『家忠補』では、北西に武田勢を誘いこみ、そこで戦うために戦闘前に放火したとあるが、その後すぐに撤退していることから、『寛政譜』及び『藩翰譜』の記述を採用した。忠勝の奮戦により徳川勢は三町（約三三〇メートル）ほど退き、武田勢は追撃を試みるも、忠勝の家臣が軍を返し奮戦したことで、全軍天龍川を渡ることに成功した（『家忠補』、『寛政譜』）。忠勝が退く際、天龍川の川岸まで追撃がありその間一竿ばかりだったが、敵は退いた。天龍川を越えた真古目植松にて忠勝を待っていた家康と合流した忠勝は、扇の指物は半分切り破られ、鎧には五本の矢が折りかけてあった（『寛政譜』）。この後、浜松城に退いた。また、この殿には忠勝のほかに内藤信成、大久保忠世が任されていた（『家忠補』）。

同十六日、信玄は息子の勝頼に二俣城を攻めさせる。家康は救援のため天龍川に派兵するが、二俣城は陥落する。十一月二十八日、信長より援軍として佐久間信盛、滝川一益らが浜松に到着する。十二月二十二日、信玄は四万余騎の兵を率い、三方ヶ原にて陣を張る。徳川勢は援軍合わせて八千余騎だったが、進み戦った。申の刻（午後四時頃）になる頃に、徳川勢の先陣が進んで武田勢と戦う（『家忠補』）。忠勝は先鋒を務めたが、家臣の荒川甚太郎、本多甚六、河合政光、多門重信らが討ち死にする（『寛政譜』）。徳川勢は当初武田勢の第一、二の陣を破ったものの勝ちきれず、逆襲されたことで家康本陣が危うくなった（『家忠補』）。武田勢は後方を脅かすように攻めてきたが、忠勝はその一方を破り、家康を伴いつつ武田勢の追撃を退けた。浜松城が近くなると列伍を整え、玄黙口から入城した（『寛政譜』）。この記述に関して、『寛政譜』のみ撤退戦の活躍が記されている一方、浜松城入城については多くの史料で確認できる。なお、この際の殿は大久保忠世であった（『武徳編年集成』以下『武徳』）。[二二]

第三節　長篠の戦い・甲州征伐（天正元年～天正十年四月）

天正元年（一五七三）二月四日、家康は謙信に対し信濃に兵を出し、信玄に牽制することを求める書状を出している（『新訂家康』）。[二三] この記述に関して、『藩家譜』では、忠勝が上杉家の客将である村上義清の嫡男国清宛に「累年輝虎家康に被仰合に付て、此間権現堂を以て仰遣さるの段、祝着之旨、御報に及はる、貴所にも、直札を以被申入由」という内容の書状を送っていたという記述がある。[二三] なお「権現堂」とは、ある山伏のことを指していると『藩翰譜』で補足されており、『新訂家康』ではその山伏は叶坊光播（浄全）としている。上杉家臣河田長親文書[二四]にも権現堂宛として記述されている。国清は元亀二年頃から徳川との取次を担当している家臣であり、国清宛文書内の直札は、先述の『新訂家康』にて紹介されている書状を指していると考えられる。このことから、以前は地元の国衆との取次を担当していた忠勝が、他に榊原康政や石川数正らも取次を行っていたとはいえ、大大名である上杉家との取次を担っていたことになる。またこれは、忠勝がただ武勇に優れた武将であるだけでなく、外交や国衆統制など戦場ではない場所でも活躍していた証左に他ならない。

同十六日、信玄は病気により甲斐に退く。四月、信玄没す（『家忠補』）。六月十九日、家康は兵を率いて長篠城を攻める。火矢を用いて二の丸、武器庫を焼く（『家忠補』、『寛政譜』）。守将の菅沼正定は抵抗するも、忠勝と康政が本丸まで進み戦った。（『寛政譜』）。また、忠勝と康政の謀略により、武田の援軍が近くまで来ていたという情報は遮断され、長篠城には伝わらなかったことで戦意を失い、降伏した（『家忠補』）。九月三日、

忠勝、康政、大須賀康高、本多重次などにより、長篠救援のため森の郷に陣を構えていた武田逍遥軒を破る。近くに穴山信君、一条（信龍か）の援軍もいたが、忠勝らは追撃せずに兵を収めた。武田勢は甲斐に退いた（『家忠補』、『寛政譜』）。

同二年（一五七四）四月六日、家康は大井ノ砦（原文ママ、犬居城）を攻めるため、犬居城の対岸である瑞雲寺に着陣する（『家忠補』）。しかし、連日の大雨により気多川が洪水を起こしたことで、渡河して犬居城を攻めることができないどころか、糧道が断たれ兵糧を確保できなくなってしまい、二十日、評議にて一時撤退し、晴れた後再度攻めることに決した（『武徳』）。殿は大久保忠世、水野忠重が務めた（『家忠補』、『武徳』）。撤退時に、樽山城、光明城より武田勢が来襲し、殿の大久保・水野隊と本隊の間に入り分断した（『武徳』）。また、犬居城城主天野景貫も追撃を行い、鉄砲を用いて攻撃している（『寛政譜』）。この記述に関して、『寛政譜』においては「前後の路をさへぎり、火砲を放つて我軍を侵す。」とあり、ここから殿部隊と本隊が分断された後、殿部隊は景貫により後方から追撃され挟み撃ちにされたと考えられる。更に「忠勝すみやかに馬をかえし奮ひたたかい、三十人許を討捕、敵つゐに敗走す。」とあり、仮に忠勝が殿部隊に属していた場合、馬をかえして戦うことは考えづらい。そのため、忠勝は本隊に属しており、分断してきた部隊による追撃に対して馬をかえして戦ったと考えられる。一方、『武徳』では、「榊原小平太康政モ奮ヒ撃テ敵ヲ追捲リ首二三十級ヲ得ル」とあり、康政も通常本隊に属しているため、この撤退戦における忠勝・康政の活躍は非常に類似点が多い。『家忠補』では、康政のみ活躍が紹介されていることから、『寛政譜』の記述は断言できないが、誤りである可能性が高い。その後、御蔵城（三倉城）を経由して天方城に兵を収めた。九月七日、勝頼は二万余騎を率いて浜松城を攻めるため、天龍川付近に布陣する。家康はこれに応じて、七千余騎を率いて九列に分けて対岸に布陣するが、酒井忠次の諫言により、浜松城に退く。勝頼は追撃せず、二俣城、井伊谷城を経て信濃伊奈に退いた（『家忠補』）。

同三年（一五七五）四月五日、勝頼は内通者である大賀弥四郎に応じて、岡崎を攻めるため兵を率いて遠江平山を経て三河宇利に至るが、弥四郎が処罰されたため、失敗する（『家忠補』）。しかし、二十一日、勝頼は兵を分けて二千余騎で長篠城を囲む（『家忠補』、『武徳』）。五月一日、勝頼自身は三河八名郡、山野、吉田を経て金村に進んだ後に、長篠城に向かう（『武徳』）。六日、勝頼は兵を分けて二連木と牛窪に火を放つ。家康は同日吉田城に入り、吉田城外にて勝頼の先鋒と戦った。十日、信長は家康の長篠城救援の要請に応え、十三日、岐阜を発し、十五日、岡崎を経て、牛窪に向かう。追々合流した兵を合わせて五万余騎。この記述に関して、他史料では三万など諸説ある。十七日、信長は野田に至り、十八日、設楽原極楽寺に着陣した（『家忠補』）。同日、勝頼は兵を分けて長篠城の抑えとして小山田虎満など二千余騎を配置し、二十一日、明け方に一万余騎を率いて滝澤川を渡り、二十余町進んで十三隊に分けて陣を構えた（『家忠補』）。この記述に関して、勝頼が決戦を決めた理由は諸説あるが、『寛政譜』においては、忠勝の謀略により武田家臣小栗某を利用し、伊勢に北畠具教、近江に六角義賢が健在であり信長は派兵出来ないとする旨を伝えさせたとあるが、小栗某は家康が信長に援兵を請うた際の使者である小栗大六であると考えられ、北畠六角共に既に信長に追いやられており、武田家がそれを知らない訳もないため、『寛政譜』の記述は誤りである。その後、織田徳川連合軍は三重に柵を構え鉄砲三千挺を用意した。忠勝は軍監に任ぜられ（『寛政譜』、『藩翰譜』）、鳥居元忠、大久保忠世、平岩親吉と共に奮戦し、相対した馬場信春勢を退けている。佐々成政の進言により織田徳川連合軍は攻勢を行い、武田勢は多数の将兵を討たれるも、勝頼は土屋昌恒、初鹿野信昌を伴い逃れた（『家忠補』）。この記述に関して、『寛政譜』においては忠勝が、勝頼本陣が乱れるのを見て兵を進めると諸将もそれに呼応して進んだとあり、忠勝自身にも兵を進めようとする気持ちがあったとは思われるが、全体としては成政の進言が中心であったと考えられ、『寛政譜』の記述は誤り、または偶然の一致であったと考えられる。

同二十五日、評議した後、信長は兵を収めて岐阜に帰る（『家忠補』）。六月二日、家康は駿河由井蔵澤に兵を出し、家康自身は遠江二俣城を攻める。二俣城攻めに際して毘沙門堂、鳥羽山、和田ノ島、蜷原に砦を築き、家康は鳥羽山に着陣した（『家忠補』、『寛政譜』、『武徳』）。二俣城の

守将は依田信蕃（『寛政譜』、『武徳』）。忠勝はこの戦いにおいて自ら士卒を率いて敵を追い崩した。七日、中々攻め落とせないため大久保忠世に二俣城を囲ませ、諏訪原城に向かった（『家忠補』）。ここでも乱戦となったが、落とすことは出来なかった（『武徳』）。十九日、家康は朝比奈又太郎を城主とする光明寺城を攻める。忠勝はこの戦いにおいて康政と共に先陣を務め、仁王門に攻め登ったことで又太郎は降伏した（『家忠補』、『藩翰譜』）。七月二十日、再び諏訪原城を囲み（『家忠補』）、八月十八日、忠勝が攻め寄せた際に忠勝家臣中根重定などが戦死するも（『寛政譜』、『武徳』）、二十三日、遂に諏訪原城を陥落させた（『家忠補』）。二十七日、小山城を攻める。忠勝は、この戦いにおいて奮戦し、よく配下を指揮し、家臣中村富重、内山忠三郎、小野田与市、日置三蔵が武功を挙げた。九月十五日、勝頼が三万余騎を率いて小山城に救援に来たため、十七日、家康は諏訪原城に兵を収めて退いた（『家忠補』）。忠勝はこの撤退において旗本衆として本隊の護衛に就いている（『武徳』）。十八日、勝頼は小山城に兵を入れ、家康は陣を馬伏塚に張ったが、勝頼はその後甲斐に戻ったため家康も浜松に退いた。十二月二十三日、二俣城が降伏し、城主の信蕃は高天神城に退いた（『家忠補』）。

同四年（一五七六）二月十二日、家康は樽山城救援のために兵を出し、その後勝坂城を攻め、塩見坂砦の天野景貫と戦った。先鋒は苦戦したが、大久保忠世を右の峰に登らせ鉄砲により攻撃したことでこれを撃退した。景貫は鹿鼻ノ城（鹿ヶ鼻砦）に退いた。その後家康は浜松に退いた（『家忠補』、『寛政譜』）。忠勝もこの戦いに参加していた（『寛政譜』）。三月、勝頼は兵糧入れのため横須賀城に赴いたところ、家康も八千余騎を率いて横須賀に赴いており、勝頼勢とわずか二里余りの柴原に着陣したことで一触即発状態となったが、内藤信成の進言により相手から掛かってくるのを待ったところ、勝頼は兵を引き上げ、高天神城に兵糧を収めて甲斐に退いた（『武徳』）。この記述に関して、長篠の戦い以降勝頼の出動が増えており、各方面から攻勢をかけられていることもあるが、それ以上に信玄の死去と長篠の大敗により揺らいでいる武田の支配を継続するために、自らの存在と武威を示す目的で出陣していると考えられる。しかしながら、家康は、その勝頼の出陣にことごとく己の出陣を合わせており、外見的には家康相手に決戦せずに甲斐に退いており、逆効果となってしまっているように見える。体裁上は勝頼に従っていた配下も不信感を募らせていたのは間違いなく、結果として天正一〇年（一五八二）の武田家滅亡に向かっていったのではないかと考えられる。八月、家康は山西に兵を出し、勝頼もこれに呼応して諏訪原城を攻めようとしたが、家康が更に進んで佐夜中山に陣を移したことで、勝頼は戦わずして退いた（『武徳』）。

同五年（一五七七）秋、家康は駿河山梨に兵を進め、穴山梅雪を破る（『家忠補』）。十月十日、勝頼は駿河に兵を出す（『家忠補』）。二十日、勝頼は小山城を出て大井川を越えたが、家康が馬伏塚に出兵したためすぐに退いた（『家忠』、『武徳』）。

同六年（一五七八）三月六日、家康は浜松を出陣し、七日、掛川に着陣、八日に大井川近くに陣を移す。九日、田中城攻めを行う（『家忠』）。忠勝はこの戦いにおいて先陣の将を務めている（『武徳』）。また、田中城攻めに際して、持舟城兵が道を遮ったが、忠勝がこれを打ち破っている（『寛政譜』）。この記述に関して、『家忠補』では同年八月二十二日項にて、家康が帰陣する際に同様に持舟城兵が道を遮り、ここでは石川数正がそれを打ち破ったとあるが、『家忠』において家康は、八月二十一日から翌四日まで小山城を攻めており、持舟城兵がそこまで派兵したことは考えづらい。十日、牧野城（諏訪原城）に移り、十三日、小山城を攻める。十八日、浜松に帰る（『家忠』、『武徳』）。この記述に関して、『家忠』では十一から十八日の間、牧野城の普請を行っており、城攻めの他に普請中に攻められるのを防ぐ目的があったと考えられる。八月八日、忠勝は大須賀康高が高天神城下にて戦った際、その戦功を家康に報告している（『家忠補』）。二十一日、家康と信康は小山城に兵を出したが、落とすことは出来ず、九月四日に牧野城に退き、六日、浜松に退く（『家忠』）。この時期から小山城や田中城に対して苅田による兵糧攻めが始まる。十月十九日、勝頼は甲斐を出発し、二十八日、大地震があるも武田勢は越山し、遠江に迫る。三十日、大井川を越える。十一月二日、勝頼は小山相良に陣を移したため、家康と信康は馬伏塚に着陣した。三日、勝頼は横須賀城に向かったため、家康もそれに応じて横須賀城付近に移ると武田

勢は高天神城まで退いた。家康も同じく浜松まで退いた（『家忠』）。この記述に関して、『家忠補』では徳川勢は八千余騎で、武田勢は家康の陣取る山のふもとを通るのを嫌がったため、海路を使って横須賀城を攻めた後、家康が入江を隔てて着陣したため退いたとある。十二日、勝頼は高天神城を退くが、十四日、武田勢が再び大井川を越え、十七日、三隊は嶋田まで出張る。十九日、武田勢は青嶋から田中城まで退き、二十五日、勝頼は兵を収め甲斐に退く。それに伴い、三十日、家康も浜松に退く（『家忠』）。

同七年（一五七九）二月三十日、忠勝は浜松にて家忠にもてなされた（『家忠』）。三月二十五日、勝頼は国安に着陣し、家康と信康は夜に馬伏塚に着陣した。二十七日、勝頼は国安を退き、二十九日、大井川を渡って退いた（『家忠補』）。四月二十三日、勝頼は再び駿河江尻まで出陣し、二十五日、高天神城に陣取った。二十六日、夜に家康と信康は馬伏塚に、三河国衆は見付に着陣した。二十七日、勝頼は国安を退き、二十九日、大井川を越えて退いたため、家康は浜松に退いた（『家忠』）。六月五日、家康は岡崎を訪れる（『家忠』）。この記述に関して、「家康濱松より信康御〇〇の中なをしニ被越候（原文ママ）」とあり、この「御〇〇」には、通説である『三河物語』[二六]の「御新造（徳姫）」が入るとされており、新行氏も同様の説[二七]を取っている。七日、家康は浜松に帰った（『家忠』）。八月三日、家康は岡崎を訪れ、四日、信康が岡崎城を出て大濱に退く。五日、家忠は家康の命により弓鉄砲衆を引き連れ西尾城に入る。家康も同じく西尾城に入る。七日、家康は岡崎に戻る。九日、家康の命により信康は大濱から遠江堀江城に移る。十日、家康は再び岡崎を訪れ、各国衆に対し信康と密通しないように起請文を書かせた。十二日、家康は浜松に戻った（『家忠』）。二十九日、信康の母築山殿を岡本時仲により殺害させた。九月十五日、二俣城にて信康を自害させた（『家忠補』）。十七日、家康は北条氏政との謀により掛川を発して駿河に出陣した。十八日、二山（二つ山）に着陣し、十九日、持舟城を攻めた（『家忠』）。同日、家康は田中赤池に着陣した（『家忠補』）。二十五日、勝頼は駿府に退き、家康も井呂まで退く。二十八日、井呂を退く。三十日、牧野城まで退く。十月一日、浜松に帰る（『家忠』）。十九日、家康は掛川に出陣する。二十四日、牧野城に出陣する（いつ浜松に帰城したのかは不明）。二十四日、勝頼が田中城に迫り、二十五日、田中城に入り、二十六日、高天神城に移る。二十七日、家康は見付まで出陣し、武田勢は国安から退いた。三十日、勝頼は大井川を越えて退いたため、十二月一日、浜松に退いた（『家忠』）。

同八年（一五八〇）一月二日、家忠が年始の礼のため浜松に出仕した際の奏者（取次）を忠勝が行う。十七日、家康は信康の正室であった徳姫を尾張に送り届けるため、岡崎に赴く。二十日、徳姫を尾張桶狭間まで送り届け、二十一日、浜松に帰る（『家忠』）。三月十六日、家康は高天神城攻めのため浜松を出陣（『家忠』）。同日、中村の砦から天王ヶ馬場に出張っていた高天神城兵を攻め、忠勝勢奮戦し、的場の柵を破る。忠勝家臣内山忠三郎、日置小左衛門尉に先鋒の功あり（『家忠補』）。この記述に関して、『寛政譜』では、同年六月十七日項として記述されているが、これは誤りである。三月九日、家康は浜松に帰る（『家忠補』）。五月一日、家康は掛川に出陣し、二日、旗本は牧野、遠江勢は井呂に着陣する。三日、田中城を攻める（『家忠』）。四日、八幡山に着陣する（『家忠補』）。五日、兵卒をして田中城周辺の苅田を行った（『家忠補』、『寛政譜』）。同日、家康が掛川城に退こうとした際に、持舟城から朝比奈信置勢が出て後軍を襲ったが、石川数正が軍を返し、これを三十二人討ち取った（『家忠』）。この記述に関して、『寛政譜』では同様の軍功を数正ではなく、忠勝が挙げたとしている。六月十日、家康は横須賀に出陣し、十七日、高天神城外に火を放ち、十八日、苅田した後浜松に帰る（『家忠』）。この記述に関して、『藩翰譜』では、この際に忠勝が外城を破ったとある。七月二十日、家康は掛川に出陣し、二十一日、井呂崎に陣を移し、苅田を行った。二十二日、小山城を攻める。二十四日、小山城周辺の苅田を行っていた忠勝勢が小山城兵により三人討ち取られる。二十六日、家康は掛川に退き、二十七日、浜松に帰る。十月十二日、家康は兵を率いて浜松を出陣する（『家忠』）。十九日、忠勝は康政、元忠と共に高天神城攻めを行い、二十二日、忠勝は元忠と共に肘金曲輪の虎口にて戦った（『武徳』）。同日、高天神城を囲む。二十四日、四方の堀を深め、二十五日、塀で囲み、二十六日、更に柵を設置した（『家忠』）。そこにそれぞれ兵を配して堅く城を

囲んだ（『家忠補』）。

同九年（一五八一）三月二十二日、武田勢は高天神城から討って出て、高天神城が落ちる（『家忠』）。忠勝は元忠と共に再び肘金曲輪に攻めこみ、二十二の首級を挙げた（『家忠補』、『寛政譜』、『藩翰譜』）。二十四日、家康は浜松に帰る（『家忠』）。十月五日、忠勝は浜松にて家忠からもてなされた（『家忠』）。

同十年（一五八二）一月七日、年始の礼のため浜松に出仕した際の奏者を忠勝が行う。二月三日、信長は駿河口から家康、関東口から北条氏政、飛騨口から金森長近、伊奈口・木曽口から織田信忠、岩村口から河尻秀隆・森長可をそれぞれ侵攻させる（『信長公記』）。この記述に関して、『家忠補』ではより詳しく駿河口から家康三万五千余騎、関東口から氏政三万余騎、飛騨口から長近三千余騎、木曽口から信忠五万余騎、伊奈口は信長七万余騎としている。また、『寛政譜』及び『藩翰譜』では、忠勝が先陣を担っている。十六日、武田勢は小山城を捨て退く。十八日、家康は浜松城を出陣し、掛川城に入る。十九日、牧野城に着陣すると、二十日、田中城を攻めた（『家忠』）。忠勝は大須賀康高、酒井忠次、榊原康政と共に先鋒として大手曲輪を破り、八十余りの首級を挙げたが、城は落ちなかった（『武徳』）。この記述に関して、『家忠補』、『新訂家康』では同日に城主依田信蕃を退去させたとあるが、『家忠』の二十六日項にて「安土西尾殿上へ被歸候、送りにて田中働候」とあり、二十六日時点では落城していないことが分かる。

同二十一日、遠目峠にて持舟城から打って出てきた奥原勢を、先陣の将である数正、忠次、忠勝、康高、康政が破り、八十余りの首級を挙げる（『武徳』）。その後家康は三河勢を持舟に陣取らせ、自身は駿府城に入った（『家忠』）。二十三日、先陣五将により持舟城を攻め（『武徳』）、二十七日、降伏させる。二十九日、城主の朝比奈信置は家康に降り久能城に退いた（『家忠』）。三月一日、江尻城の穴山梅雪は家康の誘いに応じて降る。五日、酒井忠次は駿府に、本多重次は江尻城に、忠勝、康高、牧野衆、掛川衆、田原衆はみくらに陣替えを行った（『家忠』）。この記述に関して、『家忠補』や『武徳』では「みくら」ではなく、「神原（蒲原）」に移したとある。八日、家康本隊は興津に着陣し（『家忠』）、先陣五将は井出、河内を経て万沢に着陣する（『武徳』）。九日、本隊は万沢に至り（『家忠』）、先陣五将は身延に着陣する（『武徳』）、十日、先陣五将が市川に至ると家康も市川に入った（『家忠』）。十一日、家康は甲府に入り梅雪を連れ、既に甲府に入っていた信忠と面会する。同日、滝川一益により信忠の元に勝頼父子の首級が届く（『家忠』）。

同十三日、家康は信長に面会するため諏訪に向かう（『家忠補』）。十七日、諏訪にて家康は信長と面会する（『家忠』）。十九日、田中城が遂に落ちる（『家忠補』）。二十三日、諏訪にて論功行賞が行われ、家康は駿河一国を賜る（『家忠補』）。同日、甲府に帰る（『家忠』）。四月三日、信長は甲府に入り、十一日、駿河・遠江・三河を経て帰国する（『家忠』、『家忠補』）。この記述に関して、『寛政譜』には信長が天龍川を渡る際に、忠勝を招いて戦功を賞して侍臣に対して花実兼備の勇士であるとして紹介しているが、『信長公記』、『家忠』、『家忠補』などには記述がなく、創作である可能性が高い。

第四節　本能寺の変・小牧長久手の戦い（天正十年五月～同十二年）

天正十年五月五日、忠勝が岡崎城に赴き甲州征伐の祝いの言葉を述べた。十一日、家康は信長に拝謁するため岡崎城に入り、十五日、安土城に着く。二十一日、京都に入る（『家忠』）。六月二日、京都にて明智光秀が謀反を起こし、信長を討った。三日、家康は大坂堺に滞在していた（『家忠』）。同行していたのは、忠勝をはじめ、酒井忠次、石川数正・康通、榊原康政など微勢のみであった（『武徳』）。家康は使者として忠勝を京都に遣わしたところ、忠勝は道中、橋本（『武徳』では枚方）にて茶屋四郎次郎と会い、光秀謀反の知らせを聞き、馬をかえす（『寛政譜』）。家康はこの報を聞き、すぐに京都に上り仇を討とうとしたが、老臣に諫められる（『家忠補』）。この記述に関して、『寛政譜』では老臣含め軍勢を飯盛八幡に進めており、そこを戻った忠勝が諫め、老臣も諫言しなかったことを恥じ、忠勝の意見に賛同している。一方、『武徳』では、家康は飯盛の社は天然の要害であるから、そこで籠城し、大坂の丹羽長秀と共に光秀を打ち取らんとしており、その後、『寛政譜』同様忠勝に諫められている。その後伊賀・伊勢路を通って、四日、三河大濱に着いた（『家

忠』）。この記述に関して、『武徳』では、二日に飯盛、津田、穂谷、尊延寺、普賢寺、山田と至りそこで泊まって、三日、綴喜郡木津川を渡り、長尾村八幡山に泊まる。四日、石原村にて地侍による襲撃を受けるが、撃退し白江、老中、江野口経て、宇治田原に入る。更に信楽にて多羅尾光俊の支援を受ける。五日、信楽から波多野、高見峠、音聞峠を越えて伊賀に入り、鹿伏兎に泊まる。六日、遂に伊勢白子浜に至り、三河大濱に着く。石原村の襲撃の際に忠勝は浅手ながら傷を負っており、これが正しければ「無傷伝説」は無かったこととなる。また、先導は飯盛から山田までは郷導の十市玄蕃、山田から伊賀までは同じく郷導の吉川父子、伊賀以降は忠勝の命により服部正成が務めている。『寛政譜』ではルートはほぼ同一ながら、郷導を織田家臣長谷川秀一に任せ、忠勝が常に先導していたとある。一方、『家忠補』では、ルートは同一だが、先導したのが酒井忠次となっている。ルート及び日程については、他に「石川忠総留書坤」を根拠とした相田氏の説[二七]などが挙げられるが、本稿においては追究しない。

同十三日、家康は明智討伐のため岡崎に入る。十四日、鳴海城に着陣する（『家忠』）。同日、家康は美濃の吉村氏吉に対して明智討伐のため、上洛に協力するよう書状を送っている。忠勝はその副状を書いている（『新訂家康』[二八]）。また、高木貞利に対しても同様の内容の書状を送っており、こちらは忠勝名義のみとなっている（『新訂家康』[二九]）。十五日、光秀を京都にて織田信孝、秀吉、長秀、池田恒興により打ち取ったと信孝より連絡があり、二十一日、これを受け、先陣を津島、本隊を鳴海に布陣させていた家康は浜松に退いた（『家忠』）。

『新訂家康』によると、この時期に前後して本能寺の変によって甲斐、上野、信濃を治めていた一益などの織田家臣が中央に退いたのを狙い、北条氏政が氏直を大将として侵攻を始めたため、七月三日、家康は浜松を出発して掛川着、四日、田中着、五日、江尻着、七日、大宮着、八日、庄司着、九日、甲府に着いた（『家忠』）。八月一日、北条勢二万余騎が北より新府に迫ったため、六日、新府にて家康先陣の三河衆三千余騎と一里ほどの距離で対峙、七日、甲府にいた徳川勢も新府山に入る。北条勢は更に前進し、わずか半里ほどに陣取った。十日、家康自身も新府城に入る（『家忠』）。十二日、別動隊による甲府攻めが失敗したことで、氏政の挟撃策は失敗に終わる（『家忠補』）。二十日、家康は陣中見舞いのため甲府に赴き、同日新府城に戻る。この後、十月二十九日まで小競合いが続き、家康も新府城に留まった。十月二十九日、和議を結び、北条勢は兵を収めた。十二月十二日、家康も甲斐を発し、十四日頃、浜松に帰る（『家忠』）。

同十一年（一五八三）一月十六日、家康は岡崎に赴き、十八日、織田信雄との面会のため星崎に赴いた。閏一月一日、家康は浜松に帰る（『家忠』）。三月五日、同日付吉野助左衛門宛本領安堵状の副状の発給者として忠勝の名前があり、家康の側近として活動していた一端が見える（『新訂家康』[三〇]）。四月二十八日、家康は兵を率いて浜松を出て甲斐に赴いた（『家忠補』）。この記述に関して、『新訂家康』では、三月二十八日付諏訪頼忠宛所領宛行状があるため、甲斐に赴いたのは、それ以前であるとしているが、甲斐の寺社に対する所領安堵状が四月十八日から二十七日に集中しており、その翌日に家康自身も甲斐に出立したと考えれば、特段無理はないと思われたため、『家忠補』の記述を採用した。五月九日、家康は甲斐より浜松に帰る。八月二十四日、家康は再び甲斐に赴く（『家忠』）。九月十五日、忠勝は甲斐滞在中に常陸下館の水谷勝俊宛に畿内の情勢を伝えている（『中村不能斎採集文書』「大日本」[三一]）十月二日、甲斐を発して江尻に赴く。十一月十五日、江尻を発して駿府に赴く。十二月四日、駿府を発して浜松に帰る（『家忠』）。

同十二年（一五八四）三月七日、家康は伊勢の信雄救援のため、浜松を発して岡崎に赴き、八日、矢作、九日、あの（阿野）、十日、鳴海、十二日、山崎、十三日、津島、十四日、桑名に至る（『家忠』）。この記述に関して、行軍速度が非常に遅いことから、既に美濃に入って十四日に犬山城を落とした池田恒興・森長可勢を警戒していたことが窺える。十六日、清州近くの落合郷に着陣し、十七日、犬山城下の羽黒にて、徳川勢は森勢と戦いこれを破り、三百余りを討ち取った（『家忠』）。二十一日、秀吉は十二万余騎を率いて大坂を発し（『家忠補』）、二十六日、美濃に入る（『家忠』）。二十八日、家康は小牧山城に本陣を構え、秀吉もそれに応じて小牧原に着陣する。二十九日、信雄も小牧山城に入る（『家忠』）。四

月五日、秀吉は本陣を楽田に移し、六日、夜半に三好秀次（羽柴秀次）を大将として、池田父子、森長可、堀秀政ら二万余騎を三河に向かわせた（『家忠補』）。八日、家康は小牧山に酒井忠次、本多忠勝、石川数正、松平家忠らに小牧山城を守らせ、家康、信雄らは小牧山城を出て小幡城に至る（『家忠補』）。この記述に関して、『武徳』によると小牧山城守備は五千余騎としている。九日、長久手にて池田父子、長可をはじめ一万五千余騎を討ち取る大勝をあげる（『家忠』）。秀吉は秀次敗走の報を聞いて、二万余騎を率いて楽田を発して救援に向かう。忠勝はそれを見て、三百余騎のみを率いて秀吉勢に肉薄する。距離は僅か四、五町（四百～五百メートル）であり、鉄砲を打ち込み、家臣永井与次郎を救うため敵陣に馳せ入りながら、妨害を続けた。秀吉勢はこれを討とうとしたが、秀吉がそれを許さなかった（『家忠補』、『寛政譜』）。秀吉勢が龍泉寺に至ると長久手敗戦の報が入ったため、秀吉は龍泉寺に着陣し、家康は長久手の戦いが終わりすぐに小幡城に退き、忠勝もそこに合流した。その後、忠勝は家臣三浦九兵衛尉、梶次郎兵衛尉、牧惣二郎などを斥候として龍泉寺を偵察させ、更に家臣松下勘右衛門尉、向坂与五左衛門尉、小野与次郎などを偵察させ、水野忠重と共に家康に夜襲を進言するも、許可されなかった（『家忠補』）。この記述に関して、『寛政譜』では、信雄の指示で奇襲を行っているが、その内容が『家忠補』の秀吉勢に肉薄した際と同様であり、そもそも信雄の指示で家康旗本の忠勝が動くのは疑わしいため、『家忠補』の記述を採用した。

同日夜、家康・信雄勢は小牧山城に退き、兵を収めた（『家忠補』）。五月一日、秀吉は堀秀政を楽田に、加藤光泰を犬山において自らは八万余騎を率いて（『家忠補』）、撤退した（『家忠』）。この日以降家康は各所に文書を送り、長久手の勝利を伝えた。忠勝も五日に丹波の豪族大槻久太郎宛、十六日に同じく蘆田時直宛に副状を発している（『新訂家康』）。また、信雄の五日付不破広綱宛文書（『新訂家康』）にて、秀吉に攻められていた竹鼻城救援のため、三日に家康先陣の忠勝が鉄砲隊を携え萩原まで来ていると述べているが、実際には救援を行っていないため、籠城を長引かせるための文言である。

六月十一日、家康は清州に入る。十六日、滝川一益、九鬼嘉隆らにより蟹江城、下嶋城、お田城（前田城）が落とされたため、家康はすぐに蟹江に赴き、十九日、下嶋城を攻め落とし、二十三日、お田城を降伏させ、七月三日、蟹江城も降伏させ、一益は船で逃れた（『家忠』）。忠勝は蟹江城攻めの際に軍功を挙げた（『寛政譜』）。五日、伊勢に入り、十三日、清州に戻った（『家忠』）。八月十六日、秀吉が再び美濃に入る。二十八日、秀吉が小堀に移ったため、家康もそれに応じて岩倉に移ったが、十七日、秀吉は退いたため、二十七日、家康も清州に戻った。十月十一日、家康は小牧山を巡見し、十七日、浜松に帰った（『家忠』）。十一月九日、家康は清州に入るが、十二日、講和の申し入れがあり、十六日、和議と成り、家康は岡崎に兵を収め、二十一日、浜松に帰った（『家忠』）。十二月二十五日、越中の佐々成政が家康に秀吉討伐の兵を挙げてほしいと訪ねてきた際に忠勝が取次を行っている（『家忠補』）。

第五節　旭日姫婚姻・北条討伐（天正十三年～同十八年）

天正十三年（一五八五）、家康は一月十六日に岡崎（『家忠』）、四月に甲斐（『家忠補』）、七月十九日に駿河、二十五日に吉良、二十六日に西尾、三十日に岡崎に赴いている。（『家忠』）。十三日、石川数正が尾張に出奔したことを受けて、十五日、家康は吉田を経て、十六日、岡崎に入る。二十二日、更に西尾に赴くが、二十七日、岡崎に帰る（『家忠』）。以下未詳だが、同時期に浜松に帰っているとみられる。

同十四年（一五八六）一月二十一日、家康は、秀吉の使者羽柴勝雅と面会した（『家忠補』）。この記述に関して、『家忠』にて二十三日項に（家忠が）明日浜松に赴くとあるため、家康は面会当日または翌日に浜松に帰ったと見られる。二十六日、北条氏政との面会のため、駿府に赴き、三月九日、伊豆三島にて面会を行い、二十一日、浜松に帰った（『家忠』）。四月十九日、秀吉との講和の結果、家康は秀吉の妹である旭日姫と婚姻する運びとなったため、譜代家臣である天野康景を祝言の使者として派遣したが、秀吉はこれに怒り、酒井忠次や本多忠勝、榊原康政を使者として要求した（『家忠』）。この記述に関して、秀吉は康景を、「無御存知仁にて候」と評しており、康景が奉行であったこともあるだろうが、秀吉が徳川家中について詳しくないことが見て取れる。また、『武徳』にお

いては、家康は康景が使者として認められなかったことに怒り、一時は婚姻をやめようとまでしたが、信雄の家臣土方雄久により、信雄の面目を立ててほしいと懇願されたため、これを受け容れた。二十三日、忠勝が祝言の使者として上洛した（『家忠』「大日本」）。秀吉はこれに喜び、定宗の脇差、藤原定家の小倉山の色紙を与えた（『家忠』、『寛政譜』）五月五日、忠勝は女房衆に清州まで送られ、浜松に帰った（『家忠』）。十四日、秀吉の妹旭日姫の一行は、浜松に入った（『家忠』）。

七月十七日、家康は真田昌幸討伐のため浜松を出て、駿府に赴くが、八月七日、秀吉から仲裁があり、真田攻めが延引したため、二十日、駿府から浜松に帰った（『家忠』）。九月十一日、家康は居城を浜松から駿府に移すことを決め、引っ越しを始めると共に駿府を訪れる。十三日、家康は浜松に戻り、二十四日、岡崎に赴き、秀吉の使者と面会を行った。二十六日、面会の結果（『家忠』）、秀吉の母大政所を質とすることで家康の上洛が決まる（『家忠補』）。後に直政、忠勝、康政などから親族各一人を質として京都に置くこととなる（『家忠補』、『寛政譜』、『武徳』）。二十七日、家康は浜松に帰る（『家忠』）。十月十四日、家康は上洛のため、浜松から吉田に入る。十七日、大政所が質として岡崎に赴く。二十日、家康は岡崎を発して大坂に向かう（『家忠』）。忠勝はこの上洛にも従った（『家忠補』、『寛政譜』）。二十六日、大坂に着き、二十七日、秀吉に大いにもてなされた。十一日、家康は帰国し、岡崎に戻り、十六日、浜松に帰る（『家忠』）。十二月四日、家康は浜松城から駿府城に居城を移す。

同十五年（一五八七）七月二十七日、家康は上洛のため駿府を発して（『家忠補』）、二十九日、岡崎に至り（『家忠』）、八月五日、秀吉自ら近江大津まで迎え、共に入京した（『兼見卿記』[一三七]）。十三日、家康は帰国し、海路で田原に戻り、十四日、岡崎を経て、十七日、駿府に帰った。この上洛の際に大納言に叙される（『家忠』）。

同十六年（一五八八）三月一日、家康は上洛のため駿府を発し、十四日、入京する。二十八日、大坂から上京してきた秀吉を東寺で迎え、二十九日、共に鷹狩を行った（『家忠』）。四月十四日、聚楽第にて行幸があり（『家忠』）、忠勝は従五位下中務大輔に叙される（『家忠補』、『寛政譜』、『藩翰譜』）。二十七日、帰国し、岡崎に戻る（『家忠』）。六月二十二日、大政所が病のため家康は駿府を発し、二十三日、岡崎を経て、上洛する。九月四日、京都から田原に帰国し（『家忠』）、十一日、駿府に帰る（『家忠補』）。

同十七年（一五八九）一月二十八日、家康は上洛のため駿府を発し、三河田中に至る。三月一日、西郷衆と忠勝同心衆の間で喧嘩があった（『家忠』）。この記述に関して、原文では「本田中務同心衆」とあり、『家忠』においては、中務大輔としての忠勝が初出である。なお、西郷衆は三河国衆の一つであると考えられる。七日、家康が上洛する（『家忠補』）。六月六日、家康は京都から帰国の途に就き、七日、海路で田原に帰国し、八日、中泉を経て（『家忠』）、十日、駿府に帰る（『家忠補』）。八月二日、秀吉の命である富士の大木の引出しのため、家忠が興津に赴いた際に、忠勝をもてなしている（『家忠』）。この記述に関して、『家忠補』では、「遠参両国の諸将各興津に至る」とあり、忠勝ら旗本衆もこの引出しに参加していたと思われる。十月三日、忠勝は再び家忠からもてなしを受ける。十二月二日、家康は上洛のため駿府を発し、吉田に赴き、三日、岡崎を経て、五日、岡崎を発する（『家忠』）。九日、入京して、十日、秀吉と会談を催し、十二日、京都を発して（『家忠補』）、十六日、西尾に帰国し、十七日、岡崎を経て、十八日、吉田に戻る（『家忠』）。この後の動きは不明だが、駿府に帰ったものと思われる。

同十八年（一五九〇）二月七日、家康は秀吉の北条討伐の命により、酒井家次、本多忠勝、榊原康政、平岩親吉、鳥居元忠、大久保忠世、井伊直政の七将を先陣とし、同日七将は駿府を発して江尻に至る（『後陽成天皇紀』「大日本」[一三八]）。十日、家康も駿府を発し、賀島（加島）に至り、先陣は由比に着陣する。十五日、先陣は更に吉原へと進み、二十四日、沼津付近に着陣する。同日、家康は長久保城に入り、二十五日、沼津に至る。三月二日、そうか原に陣替え、十日、伊豆韮山城攻めを始める。二十七日、秀吉本隊が到着する（『家忠』）。二十八日、韮山城攻めを織田信雄に任せ、豊臣秀次ら五万余騎は中山城攻めを行い（『家忠補』）、家康は中久保を越えて山中城北の山を経て小田原口に迫った（『家忠補』、『寛政譜』）。二十九日、秀次勢が山中城を陥落させる（『家忠』、『寛政譜』）。守将北条氏勝は、甘縄城（玉縄城）に逃れた（『家忠補』）。四月一日、家康

は箱根山近くに陣取り、二日、更に二里ほど進み、三日、小田原に至り、四日、小田原城近くに着陣した（『家忠』）。二十一日、秀吉、家康は忠勝に命じて、玉縄城に逃れていた氏勝を諭して降らせた（『後陽成天皇紀』、『古今消息集』「大日本」[三七]）。この記述に関して、『寛政譜』では、忠勝の家臣都筑為政を遣わして、「為政の叔父」である仏僧をして説得したとあるが、浜名の国衆である都筑氏と武蔵の寺院の仏僧が近い血縁であるとは考えられず、これは明確な誤りで、『藩翰譜』の「氏勝の叔父」である仏僧をして説得したのが正しいと見られる。

同二十六日、家康・秀吉本隊は小田原を囲み、氏勝を郷導として、家康勢からは本多忠勝・忠政、親吉、元忠、植村泰忠など、秀吉勢からは浅野長吉（長政）・幸長、木村重茲などが一万余騎を率いて武蔵・両総の諸城を攻めさせた（『家忠』など）。別動隊は、武蔵江戸城、上総佐倉城、土気城、東金城、長南城を落とした（『寛政譜』、『藩翰譜』）。この記述に関して、『家忠』では、江戸城は四月二十二日時点で既に降っており、別動隊が落としたものではないと思われる。また、『武徳』では、五月十八日までに三万余騎を以て、長南、長北、伊南、伊北、万喜、万里谷、鶴亀、佐貫、久留里、池和田、勝浦、小井戸、海上、裳原、五井、矢作、鳴渡、小瀧、根小屋、印西、椎津、窪田、一宮、飯沼、多高、関宿、古河、筒戸、臼井、国府台、千葉、小浜、相馬、鳴戸、守山、土気、東金、佐倉など四十八城を降したとある。その内訳は両総の城が大半を占めており、城同士の距離も近い。また、後方の城であることから、本拠小田原城に城兵を割かれ、僅かな守備兵しか残っていなかったことが推測される。その小田原城も囲まれたことで後詰の望みも薄いため、早々に降伏したのだろう。また、別動隊を更に分散させて多くの城を落としたと見られる。

五月二十二日、武蔵岩付城を攻め、忠勝は苦戦しながらも大手門を破り、これを落とした（『家忠』、『新修家康』）。その後、上野鉢形城を包囲していた上杉景勝・前田利家勢（それぞれ越後・加賀から南下）と合流しこれを落とした（『寛政譜』、『藩翰譜』）。六月二十四日、八王子城を落とした（『家忠』）。同日、忠勝及び親吉は、相模三増郷に印判なき者に人足・伝馬を出すことを禁ずる禁令を出した（「相州文書」「大日本」[三八]）。この記述に関して、一時的ではあるが、忠勝、親吉がこの地域の支配権を持っていたことが分かる。二十五日、武蔵筑井城を攻め落とした（『新訂家康』[三九]、『後陽成天皇紀』「大日本」）。この後、秀吉の命により、長南城に入り、両総を治めた（『寛政譜』、『藩翰譜』）。七月五日、氏政は降伏し、六日、小田原城を明け渡した（『家忠』）この記述に関して、『寛政譜』では、忠勝が康政と共に城の請取に参加したとあるが、『家忠』では、康政のみが記述されている。十日、家康も小田原に入り、十三日、秀吉も次いで小田原に入った。同日、家康の関東転封が通達され、十七日、秀吉・家康勢は奥州征伐のため江戸に入ると、二十日、江戸を発して奥州に向かった（『家忠』）。二十六日、秀吉は宇都宮に至り、忠勝に佐藤忠信の冑を賜った（『家忠補』、『寛政譜』、『藩翰譜』、『羅山文集』「大日本」[四〇]）。八月一日、家康は正式に関東に転封となった（『家忠補』）。七日以前、国割により忠勝は上総万喜十万石に封ぜられた（「滝川文書」[四一]）。この記述に関して、福島正義氏は「秀吉の近臣である滝川忠征の肝煎により、秀吉から上総の万喜城を与えられ、しかも過分の知行まで拝領し、兵糧米を四千俵頂戴した」と指摘[四二]しており、更に忠勝をはじめ、徳川重臣の知行は秀吉が干渉を行っていたと指摘[四三]している。更に、長坂信宅、中根忠元が付属される（『寛政譜』）。忠勝は万喜に封ぜられたことで城持ちとなった。

第六節　万喜（大多喜）・桑名城主（天正十八年八月～慶長五年）

天正十九年（一五九一）七月十九日、九戸政実討伐のため、家康は奥州を目指して江戸を発し、岩付に至った（『家忠』）。忠勝もこれに従う（『寛政譜』「大日本」）。十月二十七日、奥州を平定し、古河に戻り、二十九日、江戸に帰った（『家忠』）。

文禄元年（一五九二）二月二日、秀吉の朝鮮出兵に従うため、家康は江戸を発して、神奈川に至った（『家忠』）。忠勝もこれに先陣として従った（『寛政譜』）。三日、家康は藤沢に至り、四日、中原着、五日、小田原着、六日、三島着、七日、清見寺着、八日、島田着、九日、中泉着、十日、白須賀着、十一日、岡崎着、十二日、熱田着、十三日、四日市着、十四日、伊勢の関、十五日、石部着、十六日、京都に至った（『家忠補』）。

三月十七日、家康は京都を発し、肥前名護屋に向かった（『家忠』）。七月十五日、名護屋在陣の際、肥前にて梅北宮内左衛門尉による一揆が発生し、佐敷城を占領した。秀吉は一揆鎮圧のため家康と議し、浅野幸長を大将、忠勝を副将とした鎮圧軍を発したが、一揆はすぐに鎮圧されたため、途上で引き返した（『家忠補』、『寛政譜』、『藩翰譜』）。この記述に関して、年少の幸長の手本となるように忠勝を付しており、秀吉の忠勝に対する信頼の高さが窺える。同年、忠勝は家康の要望により、若年から使用していた扇の指物を献上し、代わりに中黒の御幟を賜った（『寛政譜』）。

同二年（一五九三）八月三日、明側との講和交渉に伴って、秀吉が名護屋を退いて大坂に帰ったため、家康もそれを追って名護屋を発した（『家忠補』）。二十九日、家康は大坂に戻り（『家忠』）、十月十四日、大坂を発して、十五日、伊勢の関着、十六日、四日市着、十七日、岡崎着、十八日、白須賀着、十九日、中泉着、二十日、島田着、二十一日、清見寺着（『家忠補』）、二十二日、三島着、二十三日、小田原着、二十四日、こい田着、二十六日、江戸着（『家忠』）。この後の忠勝は恐らく居城である万喜城に帰ったものと思われる。

同三年（一五九三）、『新訂家康』によると、家康は、二月十二日以降年末まで上洛して帰国していないとあり、同年行われた伏見城普請のため上洛した松平家忠らと共に忠勝も家康に同行していたと見られる。

同四年（一五九五）七月十五日、関白豊臣秀次の反逆の疑いにより、秀吉は江戸にいた家康の上洛を促したため、康政は先発して終夜兵を進め、十六日、家康も江戸を発ち、神奈川に至った。康政は相模平塚に入り、十七日、家康と平塚で合流、小田原、藤沢と進み、藤沢にて後続を一日待った（『武徳』）。この記述に関して、翌年である慶長元年（一五九六）閏七月十三日項において、忠勝と直政が家康に随行しているため、この時に合流し、共に上洛したと見られる。十九日、家康は一度小田原に戻り、二十日、三島に着いた際に、秀吉から秀次を誅殺したため京は安全だという書状が届いたため、行軍速度を緩め、二十一日、島田着、二十二日、吉田着、二十三日、石部着、二十四日、伏見に至り、秀吉に拝謁する（『家忠補』、『武徳』）。この記述以降、家康は京都に滞在し、慶長元年を迎える。

慶長元年（一五九六）閏七月十二日、畿内大地震によって伏見城に大規模な損害が出ると、十三日、早朝に家康は秀吉に謁見し、禁裏に使いを出すべきと進言すると、秀吉はこれに感心し、家康と共に歩いて京に向かった。この際に家康の従士として忠勝と直政が随行していた（『武徳』）。この後、『新訂家康』によると、九月五日に家康は伏見を発し、江戸に帰っている。

同二年（一五九七）、家康は前年十二月十五日から上洛し、この年十一月十七日まで在京だった。忠勝個人に関する記述は無いが、『武徳』によると、後年家康が上洛している際には、ほぼ直政、忠勝、康政が同行しており、この際にも同行していたと考えるのが正しいだろう。ただし、『家忠補』によると、藤森付近に直政、康政、忠勝、親吉、石川康通らの私邸が存在し、代わる代わる上洛していたという。詳細は不明だが、徳川家の出先機関のようなものだろうか。また、慶長三年（一五九八）六月十七日項において、秀吉危急の際には直政が駐屯していたとあり、家康も同日伏見にて起こった騒動について、側近ではなく直政を呼んで訪ねている。

同三年（一五九八）、『新訂家康』によると、一月三十日までは江戸に、四月十日時点では既に上洛していたという点は確実である。七月十八日、秀吉、卒去する（『家忠補』）。十二月一日、秀吉の遺言に沿い、遺物を分配した。徳川家中においては、家康に掛物一幅、金三百枚、秀忠に掛物一幅、結城秀康に刀一腰、直政に刀一腰、忠勝に刀一腰、康政に大脇差一腰、奥平定能に黄金五枚、大久保忠隣に刀一腰が贈られた（『武徳』）。この期間において、忠勝個人の動向は史料には見られない。同列である直政は家康に付き従い、主に伏見に滞在している一方、康政は翌年一月二十九日に勤番交代のため兵を率いて上洛しており、忠勝の所在は確定できない。恐らくは家康に同行していたと見られる。

同四年（一五九九）、家康は一年間畿内におり、伏見城や大坂城などに居住していた。九月七日、家康は重陽の佳節のお祝いのため、直政、忠勝、康政らを引き連れ、伏見城を発って大坂に赴いた。八日、増田長盛から家康暗殺計画の密告を受け、家康は直政と対策を講じる。九日、家

康は直政、忠勝、康政らを率いて通常の倍の兵数かつ、近臣十二名と共に秀頼と面会し、これを切り抜けた（『武徳』）。十二月三日、家康は直政、忠勝らを連れて摂津茨木にて鷹狩を行った（『武徳』）。

同五年（一六〇〇）、六月十六日、家康は上杉景勝討伐のため、大坂城を発し、伏見に至る。十八日、大津、石部、水口を経て夜中に鈴鹿峠を越え、十九日、伊勢の関着、二十日、四日市を経て晩に船を出し、二十一日、佐久島着、二十二日、吉田を経て白須賀着、二十三日、浜松城を経て中泉着、二十四日、中山を経て島田着、二十五日、丸子を経て清見寺着、二十六日、沼津を経て三島着、二十七日、箱根を経て小田原着、二十八日、藤沢着、二十九日、鎌倉八幡宮に戦勝祈願し、七月一日、神奈川着、二日、江戸着（『家忠補』）。十九日、景勝討伐のため、秀忠率いる前軍三万七千五百余騎が江戸を発する。忠勝は秀忠に属した。二十一日、家康率いる本軍三万千八百余騎も江戸を発する（『家忠補』、『新訂家康』）。二十四日、家康は三成挙兵の報せを聞き、小山にて評定を開くため、諸将を招集した。秀忠ら前軍は宇都宮に至っていた（『家忠補』）。二十五日、家康はまず、徳川諸将のみを集めて意見を聞いた（『新訂家康』、『寛政譜』）。本多正信は、諸客将は妻子が人質として大坂にいるため帰国させ、箱根に構える消極策、直政は攻め上る積極策（『新訂家康』）、忠勝は諸客将を返した上で関東勢のみで攻め上る中間策を挙げ、家康は忠勝の策を取ったとある（『寛政譜』）。それに対し、家康は、忠勝、直政、山岡道阿弥、岡野江雪斎を取次として、諸客将を集めて、各々の判断にゆだねたところ、福島正則、黒田長政をはじめ諸客将は、全員一致で三成討伐に賛成したため（『家忠補』、『新訂家康』、『寛政譜』）、家康は喜び、諸客将の前に姿を現した（『新訂家康』）。

同二十八日、三成討伐のため、諸将は小山を発して江戸に至る（『家忠補』）。八月一日、前軍が江戸を発する（『家忠補』、『寛政譜』）。先鋒は福島正則が務め、池田輝政、黒田長政なども前軍に属した（『家忠補』）。当初は福島ら客将の監視のため、軍監として直政が付されていたが、病により、忠勝も軍監として同行した（『新訂家康』、『寛政譜』、『藩翰譜』、『譜牒余録』「大日本」[四四]）。この記述に関して、水野伍貴氏は、「当初、忠勝は真田家との交渉のため秀忠勢に属していたが、直政の眼病により東海道の部隊に合流した。」と指摘[四五]している。十二日、家康から直政・忠勝宛に加藤貞泰が人質を出し、味方についたとする文書が出される（『新訂家康』[四六]）。十九日、家康から使いとして村越直吉が清州に至り、戦果あれば家康はすぐにでも御出馬あると述べたため、諸将は議して、二十日、岐阜城攻めを行うことを決めた（『家忠補』、『新訂家康』[四七]）。二十一日、輝政、浅野幸長等は上流軍として河田を経て岐阜城大手門に、正則、加藤嘉明、忠勝、直政等は下流軍として加賀井を経て岐阜城搦手に向かった（『家忠補』、『新訂家康』[四八]、『寛政譜』、『後陽成天皇紀』「大日本」）。二十二日、上流軍は木曽川を越えて荒田に兵を治め、下流軍は竹鼻城を落とした（『新訂家康』[四九]）。二十三日、上流軍及び下流軍は攻め手を交代し、上流軍は搦手を、下流軍は大手を攻め、これを陥落させた（『家忠補』、『新訂家康』[五〇]、『寛政譜』）。忠勝、直政は、岐阜城陥落の報せと各将の活躍を、軍監として家康に報告しており、家康も諸将の活躍を労い、書状を送っている（『新訂家康』[五一]）。中山道を進んでいた秀忠もこれを労い、家康同様書状を送り、直に合流する旨も述べられており、忠勝宛の書状も存在する（『新訂家康』[五二]、『譜牒余録』「大日本」）。二十四日、岐阜城を落とした先発隊は、赤坂まで進出し、そこで集合した（『新訂家康』）。

九月一日、家康は岐阜城攻略を聞き、遂に江戸を発して、十三日、岐阜城に着く（『家忠補』、『新訂家康』[五三]）。十四日、家康は赤坂岡山に着陣。その際に、島左近・宇喜多秀家勢が攻め寄せ、杭瀬川の戦いが起き、中村一氏・有馬豊氏勢が対応したが、苦戦。家康が忠勝・直政勢を派遣し、兵を収めさせた（『寛政譜』、『山田有栄覚書』「大日本」[五四]）。同日、軍議を開き、直政、輝政は大垣城攻め、忠勝、正則は大坂城攻めを提案したが、家康は大垣城に抑えを置き、本隊は大坂城を攻めることに決めた（『新訂家康』）。更に、忠勝・直政は、以前より通じていた毛利家重臣の吉川広家・福原広俊及び小早川秀秋重臣の平岡頼勝・稲葉正成宛に、毛利輝元及び小早川秀秋の責任を追及しないこと、家康に忠誠を示せば（戦いに参加しないこと）、なおざりにはしないこと、領地についても今現在のまま相違ないことを誓う起請文を送っている（『新訂家康』[五五・五六]、『後陽成天皇紀』「大日本」）。この記述に関して、忠勝が、関ケ原において戦闘面だけでなく、謀略においても非常に大きな役割を果たしていたことは間違

いない。十五日、関ケ原の戦い当日である。忠勝は、第一陣である福島正則の脇備えとして布陣した（『寛政譜』）。戦いが始まると、忠勝は、島津勢を攻め立てるものの、鉄砲により秀忠から賜った三國黒を喪う。家臣梶金平が己の馬を差し出し、難を逃れた（『家忠補』、『藩翰譜』）。正午頃まで拮抗した戦いが続いていたが、小早川秀秋の裏切りにより、西軍は総崩れとなり、忠勝は九十余りの首級を上げた（『寛政譜』）。終戦後、正則と忠勝が家康本陣を訪れた際には、正則が忠勝の指揮を称え、家康は忠勝の武勇は今に始まったことではないと述べ、忠勝はこれに敵が弱兵であったからこそと謙遜している（『家忠補』、『寛政譜』）。十六日、追撃のため、佐和山城を囲み、家康は野並に着陣した（『家忠補』）。十七日、佐和山城を攻め、これを落とした（『家忠補』）。同日、正則・長政を介して大坂西丸に入っている毛利輝元に対して、和睦と西丸退去交渉が始まり、十四日付の起請文も大いに活用された。二十三日、忠勝・直政宛に、取り成しに感謝していること、領地は嘘偽りなく安堵されること、西丸を退去し、別心を持たないことを誓う起請文が出され、二十五日、正則、輝政、長政、幸長、藤堂高虎を以て西丸が接収され、東西分かれた大戦はここに集結した（『新訂家康』[五七]）。家康は二十七日、大坂城に入り、直政、忠勝、康政、正信、忠隣、徳永寿昌に命じて、諸将の軍功を議定させた（『新訂家康』、『寛政譜』）。三十日、忠勝は正則、長政宛に、輝元を島津討伐の先鋒とすることなどが書かれた書状を送り、十月五日、大友吉統を生け捕った黒田如水を褒め称える書状の副状を送っている。十一月十四日、同じく如水宛文書の副状を送っている（『新訂家康』[五八・五九・六〇]）。

同六年（一六〇一）二月、忠勝は上総大多喜十万石から伊勢桑名十万石に転封された。旧領の大多喜は次男忠朝に五万石で与えられた（『新訂家康』、『家忠補』、『藩翰譜』、『慶長見聞録』「大日本」[六一]）。十月十二日、家康は伏見を発し、十一月五日、江戸に着く（『家忠補』）。

同七年（一六〇二）一月十九日、家康は江戸を発する。二月一日、井伊直政卒去。十四日、伏見に着く。七月、忠勝は、家康の養女と有馬豊氏との婚礼の際に、護衛を務める。十月二日、家康は伏見を発し、江戸に赴く。十一月二十六日、再び、江戸を発し、十二月二十五日、伏見に着く（『家忠補』）。

同八年（一六〇三）二月十二日、家康は征夷大将軍に任ぜられ、二十五日、将軍宣下の行列を行う（『家忠補』）。忠勝は、八番騎馬にて供奉する（『家忠補』、『寛政譜』）。

同九年（一六〇四）三月一日、家康は江戸を発ち、十七日、伏見に着く。閏八月十四日、伏見を発ち、江戸に赴く（『家忠補』）。同年、忠勝は病により隠居を申し出るも、許されなかった。家康及び秀忠からしばしば病状について問われた。この年から領地の政務は嫡男忠政が担った（『寛政譜』、『譜牒余録』「大日本」）。

同十年（一六〇五）一月九日、江戸城を発ち、二月十九日、伏見に着く。四月二十六日、秀忠の将軍宣下の行列が行われたが、忠勝はこれに参加せず、次男忠朝が参加している（『家忠補』）。この記述に関して、忠勝は病により領地で休養していたのか否かは不明であり、以降記述が更に少なくなる。

同十三年（一六〇八）六月、忠勝は、筒井定次の伊賀国没収につき、井伊直勝等と共に伊賀上野城請取を行った（『寛政譜』）。

同十四年（一六〇九）四月八日、忠勝は昨年より患っていた眼病により、隠居する（「中村不能斎採集文書」「大日本」）。

同十五年（一六一〇）閏三月十六日、忠勝は、秀忠により三河田原にて催された鷹狩に参加する（『寛政譜』）。十月十八日、忠勝卒去する（『家忠補』、『寛政譜』、『藩翰譜』）。

第三章　本多忠勝の武功検証

前章において、忠勝の生涯を可能な限り網羅してきた。これまで取り上げてきた忠勝の武功は非常に多いが、一次史料は乏しく、忠勝を主軸に書かれていない『家忠補』や『武徳』などと、忠勝個人について書かれている『寛政譜』や『藩翰譜』を比べると榊原康政、石川数正など他の武将の武功と被る点や錯誤点が多い。忠勝が武功を挙げ、二次史料において他の武将の武功として誤って取り上げられたのか、実際は他の武将が挙げた武功が後の着色により、「徳川四天王」忠勝の武功として取り

扱われ、「無傷伝説」などの逸話が創られたのかは定かではない。そのため、本章においては、他武将と似通った武功がある箇所を抜きだし、比較検証を行っていきたいと思う。

この表から見て取れるのは、第一に、忠勝による武功は全て『寛政譜』において述べられている点である。また、それぞれの出典史料を見ると、他武将による武功としている史料は、全て忠勝に対して客観的な史料である一方、忠勝による武功としている『寛政譜』は「本多忠勝」項によるもので、忠勝に対して主観的な史料となっている。その点においては、他武将による武功と考える方が、正しいように見える。

また、日付に注目すると、関東転封以前のみであり、如何に忠勝の前半生を裏付ける史料が乏しいかが窺える。『寛政譜』作成時も現在と同様に、前半生の活躍の確証を得ることが難しく、結果として、虚実織り交ぜた記述となってしまったのではないだろうか。

これらから推察するに、『寛政譜』における「本多忠勝」項の前半生における記述は、非常に信頼性に乏しいのではないだろうか。客観的な史料における前半生の忠勝個人の活躍は、限りなく少なく、裏付けが『寛政譜』によるものがほぼすべてである。そうなると、本多忠勝そのものの人物像を今一度考えなおす必要が出てくる。

三河遠江時代の忠勝は、旗本一手役としての戦働きや大名や国衆との取次を行っていたことは間違いなく、家康の側近中の側近であったことは、一次・二次史料共に示している点であるが、何故そんな家臣の前半生の史料が乏しいのか、という点を考えるに、若年期は抜きんでた武功を挙げなければ、客観的な史料に表れることが出来ないため、記述が少ないという点があるだろう。また、失われた文書があるとはいえ、発給文書数が他の一手役である康政、直政、大須賀康高、本多広孝に比べ、圧倒的に少ないのは、平時は忠勝が家康のボディーガードのような存在であったということが考えられる。恐らく、積極的には文官的な仕事はこなさなかったと思われるが、文官としての才能が全く無かったのかといえば、そうでもない。数が少ないながらも、国衆である祝田新六宛の文書[六二]や、上杉家客将の村上国清宛の文書[六三]から、大名との取次を行っており、関ケ原においては、勝利を決定づけ、その後の毛利輝元の西丸早期退去に繋がる大仕事をこなしている。

では、旗本一手役発足当初から関東転封まで、常に家康と共に行動してきた側近の忠勝が、なぜ十万石を賜ることになったか、という点において、間違いなくキーマンとなるのは、豊臣秀吉である。筆者が思うに、小牧・長久手の戦いにおいて忠勝は、並々ならぬ胆力を発揮したことを、秀吉は大いに評価したのではないだろうか。その結果、旭日姫婚姻の際にも、譜代家臣の天野康景を突っぱね、使者として忠勝らを要求したのだろう。続く北条討伐においても、別動隊として抜群の軍功を上げたことで、更に秀吉の評価を

日付	忠勝による武功（史料名）	他武将名	他武将による武功（史料名）
永禄 11 年 3 月 7 日	堀川城攻めにて、先鋒として功あり。（『寛政譜』）	榊原康政・松平信一	先鋒の功あり。（『家忠補』）
天正 2 年 4 月 20 日	犬居城攻めの撤退戦にて、馬をかえして奮い戦い、三十餘人を討ち捕る。（『寛政譜』）	榊原康政	奮い撃ちて敵を追い、首二三十級を得る。（『武徳』）
同 3 年 5 月 21 日	長篠合戦にて、勝頼本陣が乱れるのを見て、兵を進めたところ諸将もそれに続いた。（『寛政譜』）	佐々成政	信長に攻勢を進言し、これを許され全面攻勢を行った。（『家忠補』）
同 6 年 3 月 9 日・8 月 22 日	3 月 9 日、田中城攻めにて、行軍中持舟城兵が道を塞いだが、それを破った。（『寛政譜』）	石川数正	8 月 22 日、家康が小山城攻めから帰陣する際、持舟城兵が道を塞いだが、それを破った。（『家忠補』）
同 8 年 5 月 5 日	田中城から掛川城に帰陣する際、持舟城兵が襲ってきたが、追撃して多く首級を得た。（『寛政譜』）	石川数正	田中城から掛川城に帰陣する際、持舟城から朝比奈信置勢が出て後軍を襲ったが、軍を返して三十二人討ち取った。（『家忠』）
同 10 年 6 月 3 日	本能寺の変を受けて、老臣含め家康は飯森八幡に進んでおり、戻った忠勝が諫め、老臣も諫言しなかったことを恥じている。（『寛政譜』）	酒井忠次、石川数正等の老臣	本能寺の変を受けて、京都に上って仇を討とうとしたが、老臣に諫められる。（『家忠補』）
同年 6 月 4-7 日	伊賀越えにて、郷導を長谷川秀一に任せ、忠勝は常に先導していた。（『寛政譜』）	酒井忠次、十市玄蕃、吉川父子、服部正成	伊賀越えにて、酒井忠次が先導した。（『家忠補』）飯森から山田までは郷導の十市玄蕃、山田から伊賀までは郷導の吉川父子、伊賀以降は忠勝の指示で服部正成が先導を務めた。（『武徳』）
同 18 年 7 月 6 日	小田原城攻めにて、徳川から忠勝、康政が降伏した城の請取を行った。（『寛政譜』）	榊原康政	小田原城攻めにて、榊原康政が城の請取を行った。（『家忠』）

あげ、直政や康政とは違った特性を持つ家康の唯一無二の側近だったこともあり、秀吉と家康の協議の結果、上総大多喜十万石に封ぜられたのではないだろうか。実際に、関東転封後も家康に常に従っており、城持となった後も護衛としての役割を持っていたと見られる。

封ぜられた上総大多喜という場所についても注目したい。忠勝と同列である直政と康政は、それぞれ、上野箕輪十二万石、上野舘林十万石を賜っている。その理由として挙げられるのが、上杉家及び真田家に対する備えである。であれば、忠勝は安房の里見家に対する備えとなるが、忠勝がただ武勇にのみ秀でた存在であれば、大大名である伊達家や佐竹家に対する備えとして、常陸周辺に置くのが適当である。しかしながら、忠勝は大多喜に封ぜられたということは、武勇以外の要因があり、筆者はそれが文官としての役割だと考える。上総は、北条家に属した国衆が多く存在しており、国衆との連携や吸収が必須の土地である。忠勝は前述の通り、少数ながら国衆や大名間での取次を行っており、その点が評価され、上総という難しい土地を任されたのではないだろうか。また、謀反を起こしづらい特性を持つ御付人主体の家臣団や、それを率いてきた統率力もまた、上総大多喜に封ぜられた要因の一端を担っていると考えられる。

結果として、元々家中での位置は高かったものの、表面化されることが少なかった忠勝の立ち位置は、秀吉によって見出され、家中二番目の領地を賜ったことで、家中だけでなく、天下にその名を轟かせるに至ったのではないだろうか。しかしながら、前半生における一次史料が非常に少ないため、活躍が不明瞭である一方、明瞭すぎる後半生の活躍により、二次史料においては、「徳川四天王として武勇は他の追随を許さない忠義の士」というイメージが創られやすく、それが定着してしまったのではないだろうか。

おわりに

本多忠勝の生涯を追い、忠勝の役割とその武勇について取り扱った。忠勝は常に家康に付き従い、共に乱世における波乱万丈な人生を乗り越えた存在であり、武勇においても家康を助け続けた。忠勝は間違いなく忠義の士であり、その存在は家康にとってかけがえのないものであり、活躍は着色が無くとも素晴らしいものであった。しかし、後世に生きる人間にとって、不明瞭な前半生と明瞭な後半生という全く違う人生を歩んだことで、二次史料においては、「徳川四天王」としてのイメージが基となり、前半生をより明瞭にしようとした結果、虚実入り混じった情報が現代に残ってしまったのだろう。

今後の課題としては、不明瞭な前半生をより明瞭にしていくこととなるが、そのためには、更に一次・二次史料を読み解き、少しずつ正しい事実を当てはめていく必要がある。またこのような機会があれば、本稿においても一部活用した『信長公記』、『言経卿記』や、信頼度の高い『言継卿記』、『兼見卿記』といった一次史料を中心に、二次史料であるが、忠勝について詳しい記載があると思われる『寛永諸家系図伝』、『徳川実紀』についても読解を進め、忠勝の真の人生に迫っていきたいと思う。

注

（一）小宮山敏和「井伊直政家臣団の形成と徳川家中での立ち位置」（『譜代大名の創出と幕藩体制』一一五－一四四頁、吉川弘文館、二〇一五年）

（二）藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』、思文閣出版、二〇一六年

（三）水野伍貴「本多忠勝と関ヶ原の戦い」（『研究論集歴史と文化』六号、一五四－一七五頁、歴史と文化の研究所、二〇二〇年）

（四）石神教親「本多忠勝と桑名」（『本多忠勝と桑名』六七－七〇頁、桑名市博物館、二〇二一年）

（五）尾崎晃「本多忠勝（一五四－一六一〇）―徳川幕府創出の功労者―」（『千葉史学』五四号、九六－一〇〇頁、千葉歴史学会、二〇〇九年）

（六）岩沢愿彦「家忠日記の原本について」（『東京大学史料編纂所報』二号、東京大学史料編纂所、一九六七年）

（七）松平忠冬『家忠日記追加増補』［写］、一六六五年、国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/pid/2563075）（最終閲覧二〇二三年一月十日）

（八）平野仁也「『寛政重修諸家譜』の呈譜と幕府の編纂姿勢－島原藩松平家の事例から－」（『江戸幕府の歴史編纂事業と創業史』平野仁也著、清文堂、二〇二〇年）

（九）堀田正敦編『寛政重修諸家譜』第六八一巻、一八一二年成立

（一〇）「大日本史料総合データベース」（https://www.wap.hiu.tokyo.ac.jp/ships/w61/search）（最終閲覧二〇二三年一月十日）

（一一）中村孝也著『新訂徳川家康文書の研究』、日本学術振興会、丸善、一九五八－一九七一年

（一二）徳川義宣著『新修徳川家康文書の研究』、徳川黎明會、吉川弘文館、一九八三年

（一三）湯谷翔悟「本多家の家臣団」（『本多忠勝と桑名』六二－六六頁）

（一四）「祝田文書」（『静岡県史料』第五輯、静岡県、一九四一年）

（一五）新井白石『藩翰譜』、一七〇二年成立

（一六）旗本一手役（旗本先手役）。徳川家康特有の軍制、三備の一つ。国衆や城持と違い、家康の居城に常駐し、扶持も家康から与えられる。合戦においては、旗本衆の中でも先陣を務める。忠勝と同じ徳川四天王である井伊直政・榊原康政らも旗本一手役の出身。

（一七）湯谷論文前掲注（一三）

（一八）『當代記』（『史籍雑纂』第二、国書刊行会、一九一二年）

（一九）元亀元年四月十九日付徳川家康宛武田信玄文書（「白崎良彌氏所蔵文書」、『新訂家康』）

（二〇）『大河内家伝』（「大日本史料総合データベース」）

（二一）木村高敦『武徳編年集成』、一七四〇年成立

（二二）天正元年二月四日付上杉謙信宛徳川家康文書（『古今消息集』、『新訂家康』）

（二三）天正三年二月四日付村上国清宛本多忠勝文書（「村上家伝」『新訂家康』）、『新訂家康』では、天正三年と紹介されているが、『藩翰譜』の記述から天正元年の物と判断した。

（二四）元亀三年閏正月十八日付権現堂宛河田長親文書（『浜松御在城記』、『新訂家康』）

（二五）大久保忠教『三河物語』、一六二二年成立

（二六）新行紀一「信康・築山殿事件」（柴裕之編著『シリーズ織豊大名の研究　徳川家康』二三七－二五四頁）

（二七）相田文三「徳川家康の居所と行動（天正十年六月以降）」（藤井編前掲注（一））

（二八）天正十年六月十四日付吉村氏吉宛石川数正・本多忠勝文書（「吉村文書」、『新訂家康』）

（二九）同年六月十四日付高木貞利宛本多忠勝文書（「高木文書」、『新訂家康』）

（三〇）同十一年三月五日付吉野助左衛門宛本多忠勝・高木広正書状（「吉野文書」、『新訂家康』）

（三一）「中村不能斎採集文書」（「大日本史料総合データベース」）

（三二）同十二年五月三日付大槻久太郎宛本多忠勝文書（『譜牒余録』、『新訂家康』）

（三三）同年五月十四日付蘆田時直宛本多忠勝文書（『譜牒余録後編』、『新訂家康』）

（三四）同年五月二十四日付不破広綱宛織田信雄文書（「不破文書」、『新訂家康』）

（三五）吉田兼見『兼見卿記』（『和漢圖書分類目録』、宮内庁書陵部、一九一一年）

（三六）『後陽成天皇紀』（「大日本史料総合データベース」）

（三七）『古今消息集』（「大日本史料総合データベース」）

（三八）「相州文書」（「大日本史料総合データベース」）

（三九）同十八年六月二十五日付本多忠勝・平岩親吉・戸田忠次・鳥居元忠・松平康貞宛徳川家康文書（『古文書集』、『新訂家康』）
（四〇）『羅山文集』（「大日本史料総合データベース」）
（四一）同年八月七日付本多忠勝書状「滝川文書」名古屋大学文学部所蔵
（四二）福島正義「徳川家康の関東転封をめぐる諸問題」（『白鴎大学論集』第十巻第二号、白鴎大学、一九九六年）
（四三）前掲注（四二）
（四四）『譜牒余録』（「大日本史料総合データベース」）
（四五）水野論文前掲注（三）
（四六）慶長五年八月十二日付井伊直政・本多忠勝宛徳川家康文書（「大洲加藤文書」、『新訂家康』）
（四七）同年八月二十五日付井伊直政・本多忠勝・石川康通宛徳川家康文書（「成簀堂文書」、『新訂家康』）
（四八）同年八月二十二日付本多正信・西尾吉次・村越直吉宛井伊直政文書（「伊達家文書」、『新訂家康』）
（四九）前掲注（四八）
（五〇）同年八月二十七日付福島正則宛徳川家康文書（「福島文書」、『新訂家康』）
（五一）前掲注（四八）
（五二）同年九月五日付本多忠勝宛徳川家康文書（「本多忠敬所蔵文書」、『新訂家康』）
（五三）同年九月十三日付丹羽長重宛徳川家康文書（「益田文書」、『新訂家康』）
（五四）『山田有栄覚書』（「大日本史料総合データベース」）
（五五）同年九月十四日付吉川広家・福原広俊宛井伊直政・本多忠勝文書（「吉川家文書」、『新訂家康』）
（五六）同年九月十四日付平岡頼勝・稲葉正成宛井伊直政・本多忠勝文書（『関原軍記大成』、『新訂家康』）
（五七）同年九月二十二日付井伊直政・本多忠勝宛毛利輝元文書（「毛利家文書」、『新訂家康』）
（五八）同年九月三十日付福島正則・黒田長政宛榊原康政・本多忠勝・井伊直政文書（「毛利家文書」、『新訂家康』）
（五九）同年十月五日付黒田如水宛本多忠勝文書（「黒田文書」、『新訂家康』）
（六〇）同年十一月十四日付黒田如水宛本多忠勝文書（「黒田文書」、『新訂家康』）
（六一）『慶長見聞録』（「大日本史料総合データベース」）
（六二）前掲注（一四）
（六三）前掲注（二三）